



プレスリリース

アニマルプラネットは「鯨戦争」の放送で聴衆を欺く

ワシントン、D.C.、2008年11月6日 鯨類捕獲調査実施機関の(財)日本鯨類研究所は、アニマルプラネット社が11月7日から開始する「鯨戦争」という新規シリーズ番組の放送によって視聴者を欺くとして、本日、米国のケーブルテレビ・衛星放送向けテレビ放送局のアニマルプラネット (Animal Planet) 及びその親会社であるディスカバーリー・コミュニケーションズ (Discovery Communications) 社を非難した。

「鯨戦争」は現実に起きた出来事を紹介する趣旨の番組だとされるが、実際はアニマルプラネットの映画制作者自身が演出した場面が放映されるとみられ、正に「尻尾が犬を振る」のように主客転倒的因果を意図した、つまり本末転倒形式の番組である。

とりわけ、「鯨戦争」のハイライトはアニマルプラネットの指揮によってエコテロ団体シーシェパード指導者のポール・ワトソンの射殺擬似事件の演出である。これら映像はユーチューブで閲覧できる：

<http://www.youtube.com/watch?v=mJ7TXcuuAmk&feature=related>

日本鯨類研究所は、当時、鯨類捕獲調査船から何ら発砲がなかったことを明らかにしている。ビデオ映像を確認すれば素人でもその信憑性を簡単に識別できるはず：

- 洋上での困難な状態（風やうねりなど）の中、移動中の船舶から移動中の船舶へ約137メートルの距離で混雑したブリッジに位置したターゲットを正確に射撃することは極めて難しいことであろう。ビデオ映像ではワトソンは弾丸が防弾ベストに着弾しただけでなく心臓周辺に当たったと演技している。
- もし、弾丸が実際に発砲されていたとしたら、シーシェパードの船が襲撃していた調査船から直ちに離れ安全距離を保ったまま損傷評価を行なったはず。しかし、実際は何も起こらなかったように航路を維持した。
- ビデオ映像では何ら銃声は聞こえない。
- シーシェパードがライフル銃の発射炎だと主張する写真は、実際は、調査船内に設置されている夜光壁時計の文字盤だった。

- 船舶のブリッジのような、混雑した狭い区域での射撃が起きたとしたら人が叫んだり身を伏せたりするなど著しいパニックを伴った大混乱を起こしたはずである。しかし、ビデオ映像では、あつたとされる発砲に対し、何気ない無関心な反応しか映っていない。
- 防弾チョッキによって保護されていても、本物の射撃であれば、ターゲットを後方へ倒させ打撲傷などの怪我を与えるはずである。しかし、ビデオ映像のワトソンは不随意の動きもせず、防弾チョッキの下に着せていたピンバッジによって傷づいたと言い張る。西部劇映画と同様、ワトソンがバッジによって奇跡的に助けられたという主張だ。

「実際に起きた出来事」の現場にいてそれを映画撮影できる立場にあった、アニマルプラネット映画制作隊及びシーシェパードがこの発砲事件の演技に参与している。間もなくして、アニマルプラネットのニューヨーク本部からこの「出来事」および新規シリーズ番組を宣伝するプレスリリースが発表されたのである。

なお、弾丸がどうやってワトソンが身に着けていた防弾チョッキまでやってきたかを専門家による弾道学的分析を行なうべきだという日本鯨類研究所の提案はアニマルプラネット及びシーシェパードから無視された。

アニマルプラネットは「鯨戦争」シリーズ番組の第3エピソードでは日本鯨類研究所が2名のシーシェパード活動家を人質にしたと描写している。しかし、実際は2人の活動家が歯ブラシや着替えなどの携帯品を持ちながら調査船に不法侵入し、船上になるべく長く居残る意図であったことは明確だ。シーシェパードは、3日間にわたり彼らを解放することを断った。

日本鯨類研究所の森本稔理事長は次のように述べた:「アニマルプラネットは視聴者、広告者および株主のことを愚人扱いしている。『鯨戦争』は伸び悩む視聴率を逆転させることを目的とした台本どおりの計画されたテレビ番組に過ぎない。アニマルプラネットはテレビカメラのためにエコテロリストが暴力的出来事を演技するよう徴用している。ディスカバーリーは、もうはや「ノン・フィクション」テレビ番組や上質のドキュメンタリを制作する一流の放送会社として真面目に受け取ることはできない」。

お問合せ:

米国:

Gavin Carter, Butterfield Carter and Associates +1 703 619 1504 (英語のみ)

日本:

ガブリエル ゴメス: 03 3536 6521